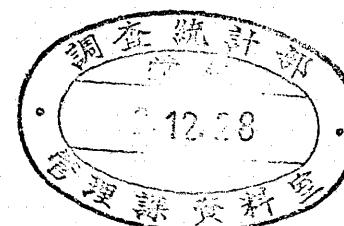


12/28



平成元年

# 工業統計速報

平成2年12月

通商産業大臣官房調査統計部

## 序

通商産業省では、明治42年以来、我が国製造業の実態を明らかにするため工業統計調査を実施しており、その結果を工業統計表として公表しております。

ここに公表する「平成元年工業統計速報」は、平成元年12月31日現在で実施した工業統計調査のうち、従業者4人以上の事業所についての主要項目を集計したものです。全調査項目の確定値についての集計結果を公表するまでには、なお若干の日時を要しますので、とりあえず速報として本書をとりまとめ、皆様の利用に供することといたしました。

なお、確定値につきましては、今後、順次「産業編」、「品目編」、「市町村編」、「用地・用水編」、「工業地区編」及び「企業統計編」として刊行することとしております。

本書を公表するに当たり、本統計調査の実施に御協力いただいた各方面の関係者に深く謝意を表するとともに、この速報が各界で広く活用されることを期待いたします。

また、今後の工業統計調査の一層の充実と改善を期するために、各位の御叱正、御教示を賜れば幸いに存じます。

平成2年12月

通商産業大臣官房調査統計部長  
原田 實

## 目 次

### 序

利用上の注意	4
--------	---

### 概 要

1. 概 況	13
2. 産業別の状況	13
3. 都道府県別製造品出荷額等の状況	21
4. 製造品出荷額等及び付加価値額でみる産業構成の変化	22
5. 有形固定資産投資総額の動向（従業者30人以上の事業所）	26
6. 従業者30人以上の事業所の都道府県別動向	30
7. 工業用地及び工業用水の状況（従業者30人以上の事業所）	36

### 統 計 表

1. 産業別統計表（産業細分類別）	2
(1) 総括統計表	2
(2) 従業者30人以上の事業所に関する在庫額及び 有形固定資産額統計表	14
2. 従業者規模別統計表（産業中分類別）	36
(1) 総括統計表	36
(2) 従業者30人以上の事業所に関する在庫額及び 有形固定資産額統計表	42
3. 都道府県別統計表（産業中分類別）	50
(1) 総括統計表	50
(2) 従業者30人以上の事業所に関する敷地面積、 建築面積、延べ建築面積	74
(3) 従業者30人以上の事業所に関する水源別用水量	86

## 利 用 上 の 注 意

### I 工業統計調査について

#### 1 調査の目的

工業統計調査は、工業の実態を明らかにすることを目的とする。

#### 2 調査の根拠

工業の統計調査は、統計法（昭和22年法律第18号）に基づく工業統計調査規則（昭和26年通商産業省令第81号）によって実施される「指定統計調査」（指定統計第10号）である。

#### 3 調査の期日

平成元年工業統計調査は平成元年12月31日現在で実施した。

#### 4 調査の範囲

日本標準産業分類（昭和59年行政管理庁告示第2号）に掲げる大分類F-製造業に属する事業所（国に属する事業所を除く。）である。

#### 5 調査の方法

従業者30人以上の事業所（製造、加工又は修理を行っていない本社又は本店を除く。）については「工業調査票甲」、従業者29人以下の事業所（製造、加工又は修理を行っていない本社又は本店を除く。）については「工業調査票乙」を用い、申告者（事業所の管理責任者）の自計申告により調査した。

### II 平成元年工業統計速報について

#### 1 工業統計速報の集計

本編は、平成元年工業統計調査における従業者4人以上の事業所について集計している。

#### 2 事業所の産業の決定方法

産業別に集計するための産業格付方法は次のとおりである。

##### (1) 一般的方法

日本標準産業分類に基づいて、産業の格付けを行っており、製造品が単品の事業所については、品目6けた番号の上4けたで産業細分類を決定し、また、品目が複数の場合は、上2けたの番号（中分類）と同じくする品目の製造品出荷額をそれぞれ合計して、その額の最も大きいもので2けた番号を決定する。

その決定された2けたの番号のうち、上記と同様な方法で3けた番号（小分類）、さら

に4けた番号（細分類）を決定し、最終産業格付けを行っている。

#### (2) 特殊な方法

上記の方法以外に鉄鋼業については作業工程、機械設備等により事業所の産業格付けをしているものがある。

#### 3 集計項目の説明

##### (1) 事業所数は、平成元年12月31日現在の数字である。

なお、事業所とは、普通に工場、製作所、製造所あるいは加工所などと呼ばれているような、一区画を占めて主として製造又は加工を行っているものである。

##### (2) 従業者数は、平成元年12月31日現在の常用労働者数と個人事業主及び家族従業者数との合計である。常用労働者とは、次のいずれかの者をいう。

ア 期間をきめず、又は1か月を超える期間をきめて雇われている者。

イ 日々又は1か月以内の期間を限って雇われていた者のうち、その月とその前月にそれぞれ18日以上雇われていた者。

ウ 重役、理事などの役員のうち、常時勤務して毎月給与の支払を受けている者。

エ 事業主の家族でその事業所に働いている者のうち、常時勤務して毎月給与の支払を受けている者。

##### (3) 現金給与総額は、平成元年1年間に、常用労働者に対して決まって支給された給与（基本給、諸手当等）及び特別に支払われた給与（期末賞与等）の額とその他の給与額の合計である。

その他の給与額とは、常用労働者に対する退職金、解雇予告手当及び常用労働者に含まれない臨時及び日雇の者に対する諸給与等である。

##### (4) 原材料使用額等は、平成元年1年間における原材料使用額、燃料使用額、電力使用額及び委託生産費であり、消費税額を含んだ額である。

① 原材料使用額とは、主要原材料、補助材料、購入部分品、容器、包装材料、工場維持用の材料及び消耗品等の使用額であり、原材料として使用した石炭、石油等も含んでいる。また、下請工場等に原材料を支給して製造加工を行わせた場合には、支給した原材料の額も含んでいる。

② 電力使用額とは、購入した電力の使用額であり、自家発電は含んでいない。

③ 委託生産費とは、原材料又は中間製品を他の企業の工場等に支給して、製造又は加工を委託した場合、これに支払った加工賃及び支払うべき加工賃である。

##### (5) 製造品出荷額等は、平成元年1年間における数字であり、製造品出荷額、加工賃収入額、修理料収入額、製造工程から出たくず及び廃物の出荷額及びその他の収入額の合計であり、消費税等内国消費税額を含んだ額である。

① 製造品の出荷とは、その事業所の所有に属する原材料によって製造されたもの（原

材料を他に支給して製造させたものを含む。)を平成元年中にその事業所から出荷した場合をいう。

また、次の場合も製造品出荷に含められる。

- ア 同一企業に属する他の事業所へ引き渡したもの。
- イ 自家使用されたもの(その事業所において最終製品として使用されたもの)
- ウ 委託販売に出したもの(販売済みでないものを含み、平成元年中に返品されたものを除く。)

(2) 製造品出荷額は、工場出荷額によっている。

(3) 加工賃収入額は、平成元年中に他の所有に属する主要原材料によって製造し、あるいは他の所有に属する製品、又は半製品に加工、処理を加えた場合、これに対して受け取った、又は受け取るべき加工賃である。

(6) 製造品、原材料及び燃料の在庫額並びに半製品及び仕掛品額は、事業所の所有に属するものを帳簿価額によって記入したものであり、原材料を他に支給して製造される委託生産品を含んでいる。

(7) 有形固定資産に関する数字は、平成元年1年間における数字であり、帳簿価額によっている。

① 建設仮勘定の増加額とは、この勘定の借方に加えられた額であり、減少額とはこの勘定から他の勘定に振り替えられた額である。

② 有形固定資産の除却額とは、有形固定資産の売却、撤去、滅失及び同一企業に属する他の事業所への引き渡し等の額である。

#### (8) 生産額及び付加価値額等の諸算式

分析項目は、次のような算式によっている。

① 生産額=製造品出荷額等+(製造品年末在庫額-製造品年初在庫額)+(半製品及び仕掛品年末額-半製品及び仕掛け品年初額)

生産額は従業者30人以上のものである。従業者29人以下の事業所については、製造品出荷額等の数値を生産額としてある。

② 付加価値額=生産額-内国消費税額-原材料使用額等-減価償却額

③ 粗付加価値額=製造品出荷額等-内国消費税額-原材料使用額等

④ 有形固定資産の投資総額

投資総額=取得額+建設仮勘定の年間増減

#### (9) 工業用地

##### ① 事業所敷地面積

事業所敷地面積とは、平成元年12月31日現在において、事業所が使用(賃借を含む)している敷地の全面積である。ただし、鉱区、住宅、寄宿舎、グランド、倉庫及びそ

の他福利厚生施設等に使用している敷地については、生産設備などの敷地と道路(公道)、ヘイ、さくなどにより明確に区別される場合及びこれらの敷地の面積が何らかの方法で区別できる場合は除いている。また、事業所の隣接地にある拡張予定地は含めている。

##### ② 事業所建築面積

事業所敷地面積内にあるすべての建築物の面積をいう。また、平成元年12月31日現在建築中のものであっても、帳簿に計上(建設仮勘定として計上)したものは含めている。

##### ③ 事業所延べ建築面積

事業所敷地内にある全建築物の各階の面積の合計である。

##### ④ 取得用地

ア 取得面積は、平成元年1月1日より同年12月31日までの1年間に工業用地として買入契約を締結したものの面積である。

対価の支払がなくても、買入契約が成立していればその契約分は含まれる。

イ 公有水面(河、海、湖、沼、その他公共の用に供する水流又は水面で、國の所有に属するものをいう。)の埋立の免許を受けた場合は、その許可をもって買入契約とし、この場合、許可面積をもって取得面積(許可時に海面、水面であっても)として計上している。

ウ 取得用地の都道府県別については、取得した事業所の所在する都道府県に計上している。

#### (10) 工業用水

##### ① 水源別用水量

###### ア 公共水道

都道府県又は市町村によって経営されている工業用水道又は上水道から取水した水をいう。

###### (ア) 工業用水道

飲料に適しない工業用水を供給する水道(工業用水道)から取水した水をいう。

###### (イ) 上水道

一般の水道のことで、飲料に適する水を供給する水道(上水道)から取水した水をいう。

###### イ 地表水・伏流水

河川、湖沼又は貯水池から取水した水(地表水)と河川敷又は旧河川敷内において、集水埋きよによって取水した水(伏流水)の合計をいう。

###### ウ 井戸水

浅井戸、深井戸又は湧泉から取水した水をいう。

###### エ その他の淡水

ア~ウまでのいずれにも属さない淡水であって、オ回収水に

も属さないものをいう。例えば、農業用水路から取水した水、他の工場から供給をうけた水などをいう。

**オ 回 収 水** 事業所内で一度使用した水を、冷却塔、戻水池、沈でん池、循環装置などの回収装置を通じて回収使用する水をいい、上記の施設を通さずに循環して使用しているものを含んでいる海、又は河川のうち常時潮の影響を受けている部分から取水した水（塩素イオン 200 PPM以上）である。

#### ② 用途別用水量

<b>ア ポ イ ラ 用 水</b>	ボイラ内で蒸気を発生させるために使用された水をいう。
<b>イ 原 料 用 水</b>	製品の製造過程において、原料としてそのまま使用された水あるいは製品原料の一部として添加使用された水をいう。
<b>ウ 製品処理用水及び洗じょう用水</b>	原料、半製品、製品などの浸漬や溶解等の物理的な処理を加えるために使用された水及び工場の設備又は原料、製品の洗じょう用に供された水をいう。
<b>エ 冷 却 用 水</b>	工場の設備又は製品の冷却用に使用された水をいう。
<b>オ 温 調 用 水</b>	工場内の温度又は湿度の調整のために使用された水をいう。
<b>カ その他の用途に使 わ れ た 水</b>	ア～オまでに含まれない就業者の飲用、入浴用、その他の雑用水をいう。

(11) 内国消費税額とは、消費税、酒税、たばこ税、揮発油税、地方道路税及び平成元年3月31日までの旧税（物品税、酒税、トランプ類税、砂糖消費税、たばこ消費税）の納付税額又は、納付すべき税額の合計である。

#### 4 工業統計調査用産業分類について

工業統計調査用産業分類は、原則として日本標準産業分類によるが、事業所数が少ないとこと等により一部日本標準産業分類とは相違している（別表1参照）。

#### 5 記号及び注記

(1) この統計表中に「-」は該当数字なし、「0」は端数四捨五入のため単位未満、「△」はマイナスの数値を表わし、「X」は1又は2の事業所に関する数字であるため、これをそのまま掲げると、個々の申告者の秘密が漏れるおそれがあるので秘匿した個所である。また、3以上の事業所に関する数字でも「X」で表わしたのは、1又は2の事業所に関する数字が前後の関係から判明する場合に秘匿した個所である。

なお、中分類29一般機械器具製造業におけるイタリック数字は中分類33武器製造業の数字が加算されている。

(2) 金額の単位は百万円とし、単位未満は四捨五入している。

別表1 日本標準産業分類と工業統計調査用産業分類との違い

工業統計調査用産業分類	日本標準産業分類
1451 丸編ニット生地製造業 1452 たて編ニット生地製造業 1453 横編ニット生地製造業 1456 ニット製品製造業（靴下、手袋、補整着を除く）（1451丸編ニット生地・同製品製造業、1452たて編ニット生地・同製品製造業、1453横編ニット製造業から生地を分割し統合）	1451 丸編ニット生地・同製品製造業 1452 たて編ニット生地・同製品製造業 1453 横編ニット製造業
1499 他に分類されない繊維工業（1492麻製織業を含む）	1492 麻製織業 1499 他に分類されない繊維工業
1811 溶解・製紙パルプ製造業（1811溶解パルプ製造業、1812製紙パルプ製造業を統合）	1811 溶解パルプ製造業 1812 製紙パルプ製造業
1821 洋紙・機械すき和紙製造業（1821洋紙製造業、1823機械すき和紙製造業を統合）	1821 洋紙製造業 1823 機械すき和紙製造業
2499 他に分類されないなめし革製品製造業（2491馬具・むち製造業を含む）	2491 馬具・むち製造業 2499 他に分類されないなめし革製品製造業
2611 高炉による製鉄業（2611製鋼圧延を行う高炉による製鉄業、2612製鋼圧延を行わない高炉による製鉄業を統合）	2611 製鋼圧延を行う高炉による製鉄業 2612 製鋼圧延を行わない高炉による製鉄業
2629 その他の高炉によらない製鉄業（2621電気炉銑製造業、2622木炭高炉銑・小型高炉銑・再生炉銑製造業を含む）	2621 電気炉銑製造業 2622 木炭高炉銑・小型高炉銑・再生炉銑製造業 2629 その他の高炉によらない製鉄業
2631 転炉・電気炉による製鋼・製鋼圧延業（単独転炉による製鋼・製鋼圧延業、2632電気炉による製鋼・製鋼圧延業を統合）	2631 転炉による製鋼・製鋼圧延業（単独転炉を含む） 2632 電気炉による製鋼・製鋼圧延業（単独電気炉を含む）
2659 その他の表面処理鋼材製造業（2651ブリキ製造業、2654めっき鉄鋼線製造業を含む）	2651 ブリキ製造業 2654 めっき鉄鋼線製造業 2659 その他の表面処理鋼材製造業

2719 その他の非鉄金属第1次製鍊・精製業 (2712鉛第1次製練・精製業、2714貴金属第1次製練・精製業、2715ニッケル第1次製練・精製業、2717チタン第1次製練・精製業、2718ウラン・トリウム第1次製練・精製業を含む)	2712 鉛第1次製練・精製業 2714 貴金属第1次製練・精製業 2715 ニッケル第1次製練・精製業 2717 チタン第1次製練・精製業 2718 ウラン・トリウム第1次製練・精製業 2719 その他の非鉄金属第1次製練・精製業
3311 武器製造業 (3311銃製造業、3321砲製造業、3331銃弾製造業、3341砲弾弾体製造業、3342薬きょう製造業、3343火薬類の入っていない武器用信管製造業、3351銃砲弾以外の弾薬外殻製造業、3352銃砲弾以外の弾薬の関連機械器具製造業 (装てん組立業を除く)、3361弾薬装てん組立業 (銃弾製造業を除く)、3371特殊装甲車両 (銃砲を搭載する構造を有する装甲車両であって、無限軌道装置によるもの) 同部分品製造業、3391弾薬投射機械器具製造業 (銃、砲を除く)、3399他に分類されない武器製造業を統合)	3311 銃製造業 3321 砲製造業 3331 銃弾製造業 3341 砲弾弾体製造業 3342 薬きょう製造業 3343 火薬類の入っていない武器用信管製造業 3351 銃砲弾以外の弾薬外殻製造業 3352 銃砲弾以外の弾薬の関連機械器具製造業 (装てん組立業を除く) 3361 弹薬装てん組立業 (銃弾製造業を除く) 3371 特殊装甲車両 (銃砲を搭載する構造を有する装甲車両であって、無限軌道装置によるもの)・同部分品製造業 3391 弹薬投射機械器具製造業 (銃、砲を除く) 3399 他に分類されない武器製造業
3412 宝石附属品・同材料加工・同細工業 (3412宝石附属品・同材料加工業・3413宝石細工業を統合)	3412 宝石附属品・同材料加工業 3413 宝石細工業

## 6 質疑の問い合わせ先

この統計表について問い合わせのある場合は、

郵便番号 100

東京都千代田区霞が関一丁目 3 番 1 号 通商産業大臣官房調査統計部工業統計課

(電話 (03) 3501-1511 内線 2394) あてに御連絡ください。

## 1. 概況

平成元年（1989年）の工業統計調査は、同年12月31日現在で実施し、このうち従業者4人以上の製造事業所について、集計結果を速報としてまとめた。同集計結果の主要項目について概観すると次のとおりである。

製造業の事業所数は42万1749事業所、従業者数は1096万人であった。

製造品出荷額等は300兆円に迫る298兆8773億円、前年比8.9%の増加と2年連続して8%台の増加となった。内訳をみると、一般機械器具製造業の同14.3%の増加を始めすべての産業が増加となった。なお、すべての産業が増加となったのは、昭和55年以来のことである。また、製造品出荷額等を都道府県別にみると、前年比で2桁台の高い伸びを示した県は、15県（前年11県）に達し、すべての都道府県で前年に比べ増加している。

付加価値額は、111兆226億円、前年比8.1%の増加となり、前年（10.7%の増加）に引き続き高い伸びを示した。

有形固定資産投資総額（従業者30人以上の事業所）は、旺盛な企業の設備投資意欲を反映して、前年比23.6%の増加という高い増加率となり、内訳をみてもすべての産業で増加となった。この増加率は昭和45年に記録した同23.8%の増加率以来の高い数値である。

工業用地・工業用水（従業者30人以上の事業所）についてみると、工業用地の取得面積は3295m<sup>2</sup>、前年比31.1%の増加と4年ぶりに30%台の高い伸びとなった。工業用水の1日当たり使用量は全体で1億8196万m<sup>3</sup>、同2.9%の増加となり、内訳別には、淡水（同3.2%の増加）、海水（同2.0%の増加）共に増加している。

## 2. 産業別の状況

### (1) 事業所数

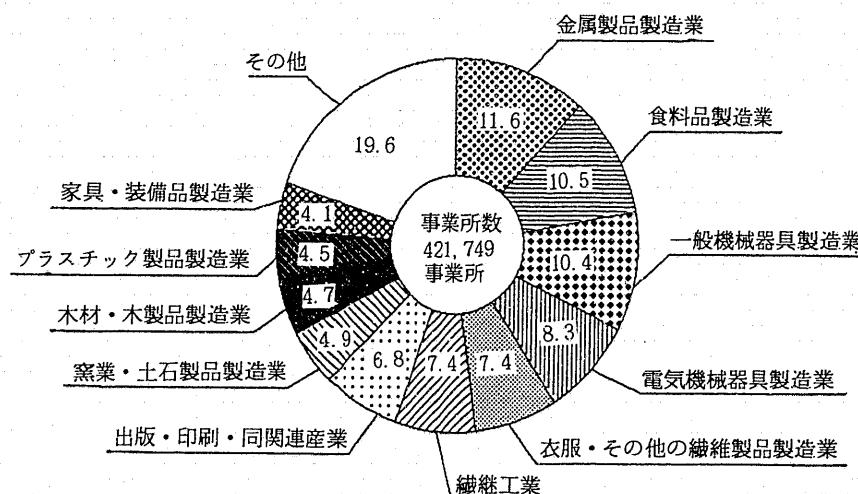
① 平成元年の事業所数は、42万1749事業所で、前年比1万5825事業所の減少（前年比△3.6%の減少）となった（第1表）。

これを従業者規模別にみると、従業者4人～9人規模の事業所数は同△7.2%の減少となったものの、これ以外の規模ではすべて増加しており、従業者20人～29人規模では同1.9%の増加、50人～99人規模では同2.0%の増加となっている。特に従業者数1000人以上の規模では同4.3%と高い増加率となっている（第3表）。

また、昭和55年との対比でみると、事業所数全体では大きな変化はないが、従業者規模別では4人～9人規模の事業所数がかなり減少している反面、50人～300人の規模の事業所数が増加しており、従業者規模では大型化の動向がうかがわれる（A表）。

② 産業別に比較すると、事業所数の最も多い産業は、金属製品製造業の4万8914事業所（構成比11.6%）で以下、食料品製造業の4万4205事業所（同10.5%）、一般機械器具製造業（武器製造業を含む。以下同じ。）4万3655事業所（同10.4%）、電気機械器具製造業3万4799事業所（同8.3%）の順となっており、この順位は前年と変わっていない（第1図、第1表）。

第1図 事業所数の産業別構成比（%）



A表 従業者規模別の事業所数（昭和55年比）

従業者規模	55年 (実数)	元年 (実数)	増加数 (実数)	55年比 (%)
合計	429,336	421,749	△7,587	98.2
4人～9人	253,169	231,362	△21,807	91.4
10人～19人	83,038	86,110	3,072	103.7
20人～29人	39,261	44,689	5,428	113.8
30人～49人	21,686	22,997	1,311	106.0
50人～99人	18,157	20,661	2,504	113.8
100人～199人	8,131	9,429	1,298	116.0
200人～299人	2,383	2,707	324	113.6
300人～499人	1,714	1,891	177	110.3
500人～999人	1,150	1,241	91	107.9
1000人以上	647	662	15	102.3

## (2) 従業者数

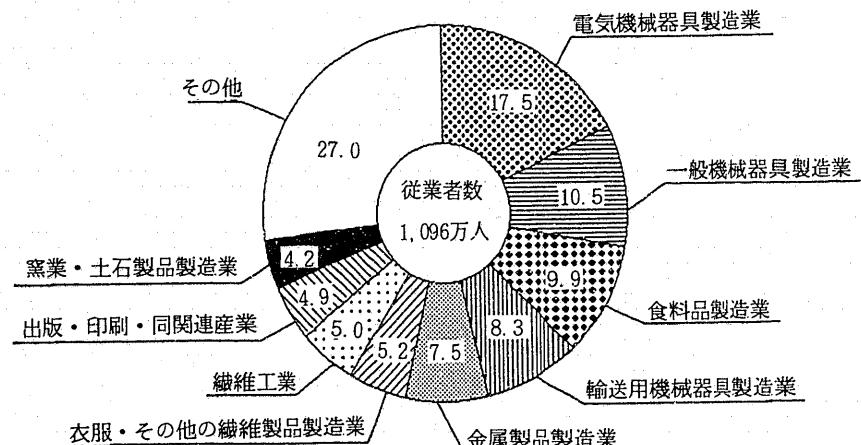
- ① 従業者数は、1096万人で5万人のわずかな増加（前年比0.5%の増加）となった。
- ② 産業別に前年比でみると、従業者数の増加した産業は、一般機械器具製造業（前年比2.3%の増加）、輸送用機械器具製造業（同2.1%の増加）、プラスチック製品製造業（同1.9%の増加）など12産業となっている。

一方、従業者数の減少した産業は、木材・木製品製造業（同△3.2%の減少）、繊維工業（同△2.6%の減少）、精密機械器具製造業（同△2.1%の減少）など10産業となっている（第1表）。

- ③ 従業者数の最も多い産業は、電気機械器具製造業の192万人（構成比17.5%）で、以下、一般機械器具製造業の115万人（同10.5%）、食料品製造業の108万人（同9.9%）、輸送用機械器具製造業の91万人（同8.3%）の順となっており、この順位は前年と変わっていない（第2図、第1表）。

- ④ 昭和55年以降、従業者数は安定的な増加傾向にある。  
従業者規模別にみると、事業所数と同様に4人～9人規模の事業所では大きく減少しているが、50人～300人の規模を中心にそれぞれ従業者数は大きな伸びを示している（B表）。

第2図 従業者数の産業別構成比（%）



B表 従業者規模別の従業者数（昭和55年比）

従業者規模	55年 (人)	元年 (人)	増加数 (人)	55年比 (%)
合計	10,291,918	10,961,766	669,848	106.5
4人～9人	1,502,820	1,399,240	△103,580	93.1
10人～19人	1,145,383	1,187,555	42,172	103.7
20人～29人	956,528	1,093,424	136,896	114.3
30人～49人	838,698	895,515	56,817	106.8
50人～99人	1,248,445	1,426,294	177,849	114.2
100人～199人	1,119,004	1,293,890	174,886	115.6
200人～299人	578,433	654,046	75,613	113.1
300人～499人	655,946	721,371	65,425	110.0
500人～999人	781,384	850,985	69,601	108.9
1000人以上	1,465,277	1,439,446	△25,831	98.2

## (3) 製造品出荷額等及び付加価値額

## ア) 製造品出荷額等

① 製造品出荷額等（加工賃収入額等を含む。）は、300兆円に迫る298兆8773億円となり、前年比8.9%の増加となった。これは2年連続の8%台（昭和63年前年比8.2%の増加）の伸びであり、昭和55年（同16.7%の増加）以来の高い伸びである（C表、第1表）。

② 産業別に製造品出荷額等をみると、すべての産業が前年比で増加となっている。とりわけ、一般機械器具製造業が29兆7582億円（前年比14.3%の増加）、輸送用機械器具製造業42兆106億円（同12.4%の増加）、非鉄金属製造業7兆1853億円（同12.0%の増加）、鉄鋼業17兆2389億円（同10.4%の増加）、金属製品製造業16兆6997億円（同10.4%の増加）となっており、これら5産業は前年比2桁台の高い伸びを示している。

また、製造品出荷額等で構成比の最も大きい電気機械器具製造業（構成比17.1%）も51兆863億円で前年比9.2%の増加となったほか、化学工業（構成比7.4%）も同8.1%の増加となっている（C表 第1表）。

さらに、昭和55年以降の動向をみると、一般機械器具製造業、電気機械器具製造業、輸送用機械器具製造業は、比較的安定的な伸びを示している。他方、非鉄金属製造業、鉄鋼業は、減少基調若しくは低水準で推移してきたが、今回の景気拡大を受けて大きく伸びに転じている。

③ 従業者1人当たり製造品出荷額等をみると、製造業平均では2727万円、前年比8.4%の増加となった。産業別には、一般機械器具製造業が同11.7%と最も増加率

が高く、以下、鉄鋼業（前年比11.1%の増加）、非鉄金属製造業（同10.5%の増加）、金属製品製造業（同10.1%の増加）、輸送用機械器具製造業（同10.1%の増加）が2桁台の伸びを示した（D表、第2表）。

④ 従業者規模別に製造品出荷額等の伸びをみると、従業者1000人以上規模の事業所（事業所数の構成比0.2%）における製造品出荷額等は、前年比11.2%（78兆2053億円）と最も高い増加率となっており、構成比も前年の25.6%から26.2%へ0.6ポイントの上昇となった（第3表）。

## イ) 付加価値額

① 付加価値額（従業者9人以下は粗付加価値額）は、111兆226億円（前年比8.1%の増加）となり、前年に引き続き高い水準の伸びを示した（C表、第1表）。

② 付加価値額の伸び率を産業別にみると、輸送用機械器具製造業が前年比12.3%の増加で最も高く、以下、一般機械器具製造業（前年比11.6%の増加）、電気機械器具製造業（同10.7%の増加）と続き、これら加工組立型産業の3産業が2桁台の高い増加率となった。

一方、付加価値額が減少した産業は、石油製品・石炭製品製造業（同△11.1%の減少）のみである（C表、第1表）。

③ 製造品出荷額等に対する付加価値率をみると、製造業平均で前年の37.4%から37.1%へほぼ横ばいで推移した。

産業別にみると、付加価値率が上昇した産業は、化学工業（前年比0.6ポイント上昇）、電気機械器具製造業（同0.5ポイント上昇）、パルプ・紙・紙加工品製造業（同0.1ポイント上昇）、衣服・その他の繊維製品製造業（同0.1ポイント上昇）と、これら4産業が微増となった。反面、石油製品・石炭製品製造業（同2.7ポイント低下）、非鉄金属製造業（同1.5ポイント低下）など16産業で付加価値率が低下となった（C表）。

④ 従業者1人当たり付加価値額については、製造業平均で前年比7.6%の増加となり、3年連続の増加となっている。このうち、輸送用機械器具製造業（同10.0%の増加）、電気機械器具製造業（同9.2%の増加）、一般機械器具製造業（同9.1%の増加）、鉄鋼業（同9.1%の増加）の伸びが大きく、反面、石油製品・石炭製品製造業（同△10.1%の減少）は減少している（第3表）。

また、昭和55年と比較（従業者数30人以上）すると、製造業平均で49.7%の増加となった。産業別の動向は、化学工業、家具・装備品製造業、パルプ・紙・紙加工品製造業等で伸びが大きく、非鉄金属製造業、食料品製造業、出版・印刷・同関連産業等で伸び率が低くなっている。減少は石油製品・石炭製品製造業のみとなった。（E表）。

C表 産業中分類別の製造品出荷額等及び付加価値額の状況

産業	出荷額等 (億円)	前年比 (%)	構成比 (%)	付加価値額 (億円)	前年比 (%)	付加価値率	
						63年	元年
合計	2,988,773	108.9	100.0	1,110,226	108.1	37.4	37.1
一般機械器具製造業 (武器製造業を含む)	297,582	114.3	10.0	119,517	111.6	41.1	40.2
輸送用機械器具製造業	420,106	112.4	14.1	111,387	112.3	26.5	26.5
非鉄金属製造業	71,853	112.0	2.4	19,508	106.3	28.6	27.1
鉄鋼業	172,389	110.4	5.8	60,860	108.4	35.9	35.3
金属製品製造業	166,997	110.4	5.6	71,638	108.3	43.7	42.9
プラスチック製品製造業 (別掲を除く)	98,067	109.3	3.3	36,862	108.4	37.9	37.6
電気機械器具製造業	510,863	109.2	17.1	190,006	110.7	36.7	37.2
パルプ・紙・紙加工品製造業	84,619	108.5	2.8	30,577	108.8	36.0	36.1
出版・印刷・同関連産業	115,794	108.5	3.9	58,483	107.3	51.0	50.5
家具・装備品製造業	37,402	108.3	1.3	16,145	105.7	44.2	43.2
化学工業	221,892	108.1	7.4	110,433	109.5	49.2	49.8
その他の製造業	46,508	107.4	1.6	19,087	106.3	41.5	41.0
精密機械器具製造業	46,000	107.0	1.5	18,848	106.0	41.3	41.0
石油製品・石炭製品製造業	70,003	106.7	2.3	9,446	88.9	16.2	13.5
飲料・飼料・たばこ製造業	99,419	106.3	3.3	25,105	104.6	25.7	25.3
なめし革・同製品・毛皮製造業	11,564	105.9	0.4	4,355	105.5	37.8	37.7
窯業・土石製品製造業	101,212	105.4	3.4	49,219	104.5	49.1	48.6
衣服・その他の繊維製品製造業	42,961	104.4	1.4	20,627	104.6	47.9	48.0
ゴム製品製造業	33,128	103.8	1.1	14,574	103.5	44.1	44.0
木材・木製品製造業	43,807	103.3	1.5	15,664	102.0	36.2	35.8
食料品製造業	219,388	103.2	7.3	77,342	103.1	35.3	35.3
織維工業	77,221	101.9	2.6	30,545	100.7	40.0	39.6

注1. 算式 付加価値率 =  $\frac{\text{付加価値額}}{\text{製造品出荷額等}}$

2. 産業の並びは製造品出荷額等の前年比率の高い順である。

3. 別掲を除くとは、プラスチック製品でも材質を問わずに用途に基づいて他の産業に分類されているものである。

D表 産業中分類別の従業者1人当たり製造品出荷額等の状況

産業	元年の従業者1人当たり 製造品出荷額等(千円)	前年比(%)	
		63年	元年
合計	27,265	106.5	108.4
(増加率の上位10産業)			
一般機械器具製造業 (武器製造業を含む)	25,944	111.4	111.7
鉄鋼業	51,329	116.8	111.1
非鉄金属製造業	43,505	114.2	110.5
金属製品製造業	20,426	106.7	110.1
輸送用機械器具製造業	46,258	106.7	110.1
その他の製造業	18,918	106.5	109.4
精密機械器具製造業	19,061	106.3	109.3
出版・印刷・同関連産業	21,531	104.9	108.9
家具・装備品製造業	16,414	109.8	108.7
飲料・飼料・たばこ製造業	75,855	105.8	108.7

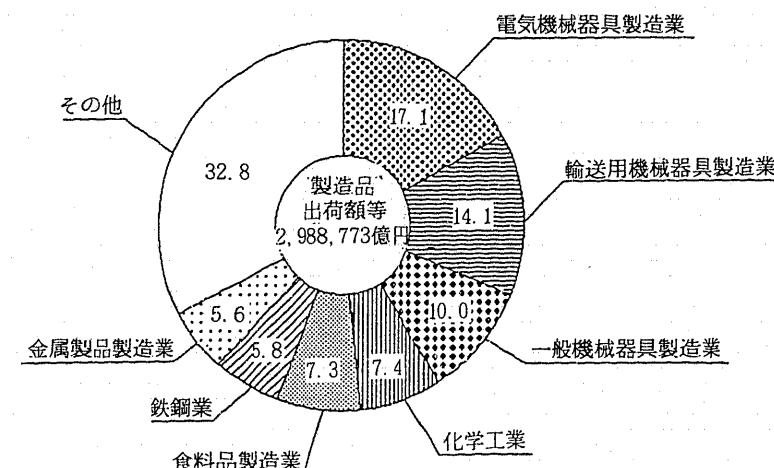
E表 産業中分類別の従業者1人当たり付加価値額の状況

(従業者30人以上)

産業	1人当たりの付加価値額
	対55年伸び率(%)
合計	49.7
伸び率の高い主要産業	
化学生産業	93.4
飲料・飼料・たばこ製造業	85.4
家具・装備品製造業	68.9
パルプ・紙・紙加工品製造業	67.1
輸送用機械器具製造業	65.1
電気機械器具製造業	53.1
鉄鋼業	51.2
伸び率の低い(又は減少)主要産業	
石油製品・石炭製品製造業	△17.8
非鉄金属製造業	14.6
食料品製造業	29.4
出版・印刷・同関連産業	39.7
衣服・その他の繊維製品製造業	40.6

注. 伸び率 =  $(\frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1) \times 100$

第3図 製造品出荷額等の産業別構成比(%)



## (4) 在庫額(従業者30人以上の事業所)

① 平成元年末の在庫合計額は、25兆8312億円、前年比8.7%の増加となった(第1表)。

② これを形態別にみると、以下のとおりである。

製造品在庫額は、8兆5549億円、前年比7.4%の増加となった。

産業別にみると、パルプ・紙・紙加工品製造業(前年比22.3%の増加)、石油製品・石炭製品製造業(同21.4%の増加)の2産業が20%台の高い増加率となったのを始め18産業が増加した。反面、飲料・飼料・たばこ製造業(同△11.4%の減少)など4産業が減少となっている。

半製品・仕掛品在庫額は、10兆9157億円、同8.7%の増加となり、精密機械器具製造業(同△1.1%の減少)を除くすべての産業が増加となった。

原材料・燃料在庫額は、6兆3605億円、同10.5%と2桁台の伸びとなり、すべての産業で増加した(第1表)。

## (5) 有形固定資産投資総額(従業者30人以上の事業所)

① 有形固定資産投資総額は14兆2099億円で、企業の旺盛な設備投資意欲を反映し前年比23.6%の増加と昭和45年(同23.8%の増加)以降最も高い伸び率となっている。

また、有形固定資産投資総額を昭和55年と比較すると1.9倍となっており、製造品出荷額等の同1.4倍を大きく上回っている(F表、第1表、第4表)。

② 有形固定資産投資総額を産業別にみると、すべての産業で前年比は増加となっている。なかでも、家具・装備品製造業が前年比52.4%と最も伸び率が高く、以下、鉄鋼業(同36.1%の増加)、一般機械器具製造業(同33.0%の増加)、輸送用機械器具製造業(同31.9%の増加)、化学工業(同30.5%の増加)と続き、これら5産業は30%以上の高い増加率となった(F表、第1表)。

F表 産業中分類別の有形固定資産投資総額の状況

産業	元年 (億円)	構成比 (%)	前年比(%)	
			63年	元年
合計	142,099	100.0	118.6	123.6
(増加率の高い産業)				
家具・装備品製造業	1,116	0.8	133.5	152.4
鉄鋼業	9,328	6.6	98.6	136.1
一般機械器具製造業 (武器製造業を含む)	11,698	8.2	122.1	133.0
輸送用機械器具製造業	20,169	14.2	104.5	131.9
化学工業	14,963	10.5	115.2	130.5
プラスチック製品製造業 (別掲を除く)	5,314	3.7	114.2	125.5
飲料・飼料・たばこ製造業	4,563	3.2	161.4	123.7
窯業・土石製品製造業	5,359	3.8	122.3	123.5
(構成比の高い産業)				
電気機械器具製造業	27,733	19.5	129.5	122.9
輸送用機械器具製造業	20,169	14.2	104.5	131.9
化学工業	14,963	10.5	115.2	130.5
一般機械器具製造業 (武器製造業を含む)	11,698	8.2	122.1	133.0
鉄鋼業	9,328	6.6	98.6	136.1

G表 製造品出荷額等の伸び率(前年比)

順位	県名	伸び率(%)
1	長崎県	15.2
2	大分県	14.6
3	青森県	13.2
4	広島県	13.0
5	愛媛県	12.9
6	石川県	12.3
7	福岡県	11.9
8	福島県	11.1
9	滋賀県	11.0
10	三重県	10.7
	全国平均	8.9

注.伸び率 =  $\frac{\text{平成元年} - \text{昭和63年}}{\text{昭和63年}} \times 100$

## 3. 都道府県別製造品出荷額等の状況

(1) 製造品出荷額等を都道府県別にみると、前年比で2桁台の高い伸びを示した県は15県(前年11県)に達し、すべての都道府県で前年に比べ増加している。

伸び率の高い順でみると、長崎県(前年比15.2%の増加)が第1位、次いで大分県(同14.6%の増加)、以下、青森県(同13.2%の増加)、広島県(同13.0%の増加)、愛媛県(同12.9%の増加)、石川県(同12.3%の増加)の順となっている(G表)。

なお、伸び率第1位の長崎県では一般機械器具製造業、第2位の大分県では電気機械器具製造業、第3位の青森県では鉄鋼業がそれぞれ伸びに最も寄与している(第5表、第6表)。

(2) 製造品出荷額等の最も多い県は、愛知県33兆1078億円（構成比11.1%）で、以下、神奈川県25兆7906億円（同8.6%）、大阪府23兆3909億円（同7.8%）、東京都21兆4032億円（同7.2%）、埼玉県15兆6518億円（同5.2%）、静岡県15兆2027億円（同5.1%）と続き、以下10位まで順位は前年と変わらない（第5表、第6表）。

(3) 都道府県別に製造品出荷額等で第1位の産業をみると、電気機械器具製造業が21府県と最も多く、次いで、食料品製造業（7道県）、輸送用機械器具製造業（4県）、一般機械器具製造業（4県）などとなっている。また、産業3類型別にみると、加工組立型産業を第1位の産業としている県（29府県）が多い（第6表）。

#### 4. 製造品出荷額等及び付加価値額でみる産業構成の変化

##### (1) 製造品出荷額等

① 製造品出荷額等について基礎素材型産業、加工組立型産業、生活関連・その他型産業の3類型別に昭和55年以降の動向をみたものが第4図である。

基礎素材型産業は製造品出荷額等が毎年100兆円前後で推移してきており、平成元年には106兆円（昭和55年比8.9%の増加）となっている。

これと比較して、加工組立型産業の製造品出荷額等は急激な上昇を示し、昭和60年には基礎素材型産業を追い越し、以降毎年その差を拡大しつつあり、平成元年には127兆円（同87.8%の増加）に達し、製造業の強力な牽引力となっている。

また、生活関連・その他型産業の平成元年の製造品出荷額等は65兆円（同39.8%の増加）であり、製造業全体（同40.9%の増加）とほぼ同率の伸びを示している（第4図、H表）。

② 昭和55年と平成元年の産業構成の変化を、製造品出荷額等の構成比によって3類型別に比較してみたものが第6図である。

基礎素材型産業は金属製品製造業、プラスチック製品製造業では若干の増加がみられるが、化学工業、石油製品・石炭製品製造業、鉄鋼業などのウエイトの低下により構成比は昭和55年の46.1%から平成元年には35.6%へと10.5ポイントの大幅な低下となった。

これに対し、加工組立型産業は、電気機械器具製造業のウエイトの大幅な増加（構成比は10.4%から17.1%へ拡大）、輸送用機械器具製造業、一般機械器具製造業の着実なウエイトの拡大により、構成比は昭和55年の32.0%から平成元年には42.6%へと10.6ポイントの大幅な上昇となった。

なお、生活関連・その他型産業では、出版・印刷・同関連産業のウエイトは増加したが、繊維工業などのウエイトが低下したため、構成比は、昭和55年の21.9%から平

成元年21.8%へとほとんど変化がみられない（第6図）。

##### (2) 付加価値額

① 付加価値額について産業3類型別に昭和55年以降の動向をみたものが、第5図であるが、第4図の製造品出荷額等の推移とは若干様相を異にしている。

付加価値額の動きでは、昭和58年の段階で、先の製造品出荷額等のケースより先に加工組立型産業が基礎素材型産業を上回ったが、その後の円高等の経済状況の変化により、昭和62年に基礎素材型産業が一旦再逆転した。しかし、その後の為替相場の相対的な安定により、昭和63年、平成元年と従来どおり加工組立型産業へのシフト傾向で推移している。

② 同様に、付加価値額の構成比によって昭和55年と平成元年の産業構成の変化を3類型別に比較してみたのが第7図である。

基礎素材型産業は、構成比では昭和55年の41.3%から平成元年の37.7%へと3.6ポイントの低下となっているが、先の製造品出荷額等のケースに比較してその低下の幅は少なく、付加価値額の面での基礎素材型産業の健闘が目立つ。

加工組立型産業は、この期間内に構成比が34.4%から39.6%へと拡大し、平成元年には基礎素材型産業を1.9ポイントだけ上回った。

また、生活関連・その他型産業は、この期間内に構成比が24.2%から22.7%へと1.5ポイント低下した。

次に、3類型ごとに産業別動向をみると次のとおりである。

基礎素材型産業においては、金属製品製造業、プラスチック製品製造業のウエイトが上昇した。化学工業は、付加価値率が昭和55年の33.7%から平成元年の49.8%まで上昇しており、製造品出荷額等では低下したものの付加価値額ではそのウエイトは上昇している。また、鉄鋼業、石油製品・石炭製品製造業のウエイトは低下している。

加工組立型産業においては、電気機械器具製造業のウエイトが昭和55年の12.4%から平成元年の17.1%へと大幅に上昇したものの、輸送用機械器具製造業、一般機械器具製造業のウエイトは、ほぼ横ばいとなっている。

生活関連・その他型産業においては、繊維工業のウエイトが低下し、製造品出荷額等では上昇がみられた出版・印刷・同関連産業は付加価値率の低下によりほぼ横ばいとなっている。



## 5. 有形固定資産投資総額の動向（従業者30人以上の事業所）

(1) 平成元年の有形固定資産投資総額は14兆2099億円で、企業の旺盛な設備投資意欲を反映し、前年比23.6%の増加となった。これは昭和48年（同20.0%の増加）、昭和49年（同21.7%の増加）に記録した20%台の伸び率を上回り、昭和45年（同23.8%の増加）以降、19年ぶりの高い増加率である。

昭和45年以降の有形固定資産投資総額の推移をみると、第一次石油ショック前の昭和48年、昭和49年、第二次石油ショック後の昭和54年、昭和55年、円高が進行する以前の昭和59年、昭和60年、そして、昭和63年、平成元年に高い伸びを示している（第8図）。

(2) 有形固定資産投資総額について投資内訳をみると、機械及び装置への投資額が7兆7417億円（構成比54.5%）と最も大きく、以下、建物及び構築物への投資額は2兆8216億円（同19.9%）、土地の取得額は9675億円（同6.8%）となっている。なお、その他への投資額は2兆6791億円（同18.9%）である。

過去20年間の投資内訳の実績平均は、機械及び装置向けが構成比56.2%、建物及び構築物向けが同21.4%、土地向けが同6.2%となっており、この構成比に大きな変化はみられない。

(3) 有形固定資産投資総額について産業別にみると、投資総額の最も大きい産業は電気機械器具製造業の2兆7733億円（構成比19.5%）で、以下、輸送用機械器具製造業の2兆169億円（同14.2%）、化学工業1兆4963億円（同10.5%）、一般機械器具製造業1兆1698億円（同8.2%）の順となっており、4産業を合わせた有形固定資産投資総額は製造業全体の2分の1を超えていている（第1表）。

(4) 産業3類型別にみると、基礎素材型産業、加工組立型産業、生活関連・その他型産業ともほぼ同様の動きを示しており、円高不況による低迷の後、今回の大型景気の中で2年連続の大幅な増加となり、好調に推移している。しかしながら、昭和59年から昭和62年の円高進行後において、基礎素材型産業、生活関連・その他型産業が比較的安定的な動きを示す一方で、加工組立型産業は、昭和59年、昭和60年と大幅な伸びを示したが、昭和61年、昭和62年に大幅な減少となった（第9図）。

産業別の動向を昭和55年との比較でみると、加工組立型産業では、電気機械器具製造業が2.8倍、一般機械器具製造業が1.9倍、輸送用機械器具製造業が1.7倍となっている。また、基礎素材型産業では、金属製品製造業が2.4倍、化学工業が1.9倍、鉄鋼業が1.3倍、生活関連・その他型産業では、出版・印刷・同関連産業が2.6倍、繊維工業が1.6倍などとなっている（J表）。

(5) 製造品出荷額等に対する有形固定資産投資総額の比率は昭和53年の4.1%から緩やかな上昇基調で推移し、平成元年は5.7%となっている（K表）。

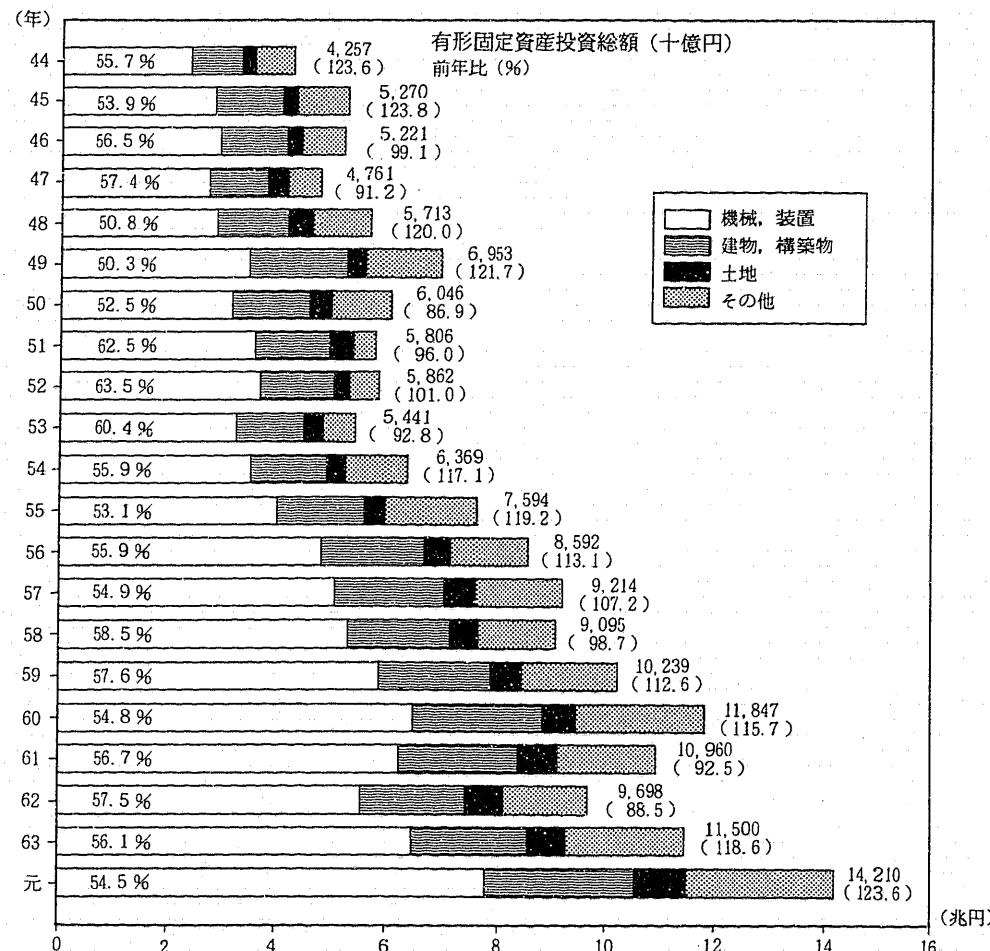
J表 産業中分類別の有形固定資産投資総額（昭和55年比）

産業	55年 (億円)	構成比 (%)	元年 (億円)	構成比 (%)	55年比 (%)
合計	75,940	100.0	142,099	100.0	187.1
食料品製造業	4,787	6.3	7,341	5.2	153.3
飲料・飼料・たばこ製造業	1,498	2.0	4,563	3.2	304.6
繊維工業	1,845	2.4	2,927	2.1	158.6
衣服・その他の繊維製品製造業	352	0.5	945	0.7	268.2
木材・木製品製造業	755	1.0	828	0.6	109.7
家具・装備品製造業	543	0.7	1,116	0.8	205.4
パルプ・紙・紙加工品製造業	3,257	4.3	6,757	4.8	207.5
出版・印刷・同関連産業	2,084	2.7	5,482	3.9	263.1
化学生産業	8,088	10.7	14,963	10.5	185.0
石油製品・石炭製品製造業	2,208	2.9	1,803	1.3	81.6
プラスチック製品製造業 (別掲を除く)	2,182	2.9	5,314	3.7	243.5
ゴム製品製造業	1,551	2.0	1,895	1.3	122.2
なめし革・同製品・毛皮製造業	65	0.1	151	0.1	232.4
窯業・土石製品製造業	4,054	5.3	5,359	3.8	132.2
鉄鋼業	7,302	9.6	9,328	6.6	127.7
非鉄金属製造業	2,449	3.2	3,877	2.7	158.3
金属製品製造業	2,703	3.6	6,406	4.5	237.0
一般機械器具製造業 (武器製造業を含む)	6,138	8.1	11,698	8.2	190.6
電気機械器具製造業	10,067	13.3	27,733	19.5	275.5
輸送用機械器具製造業	11,826	15.6	20,169	14.2	170.6
精密機械器具製造業	1,519	2.0	2,194	1.5	144.5
その他の製造業	667	0.9	1,250	0.9	187.6

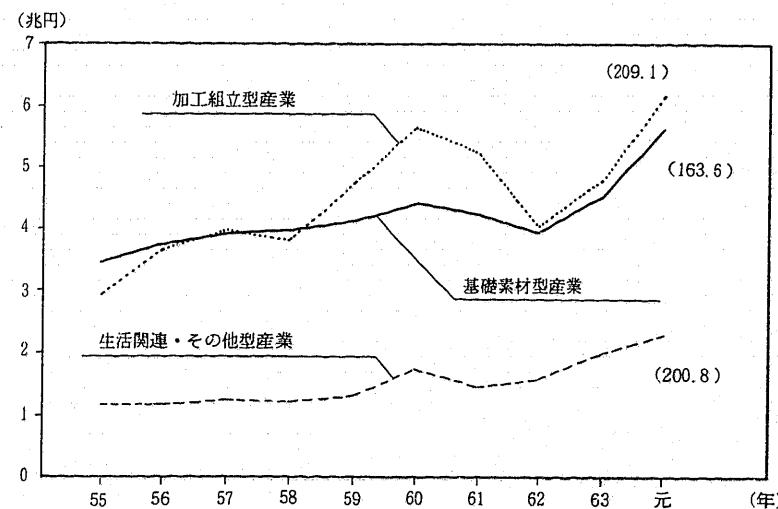
K表 製造品出荷額等に対する有形固定資産投資総額の比率(%)

53年	54年	55年	56年	57年	58年	59年	60年	61年	62年	63年	元年
4.1	4.3	4.3	4.6	4.9	4.7	4.9	5.4	5.2	4.6	5.1	5.7

第8図 有形固定資産投資総額の推移



第9図 産業3類型別、有形固定資産投資総額の推移



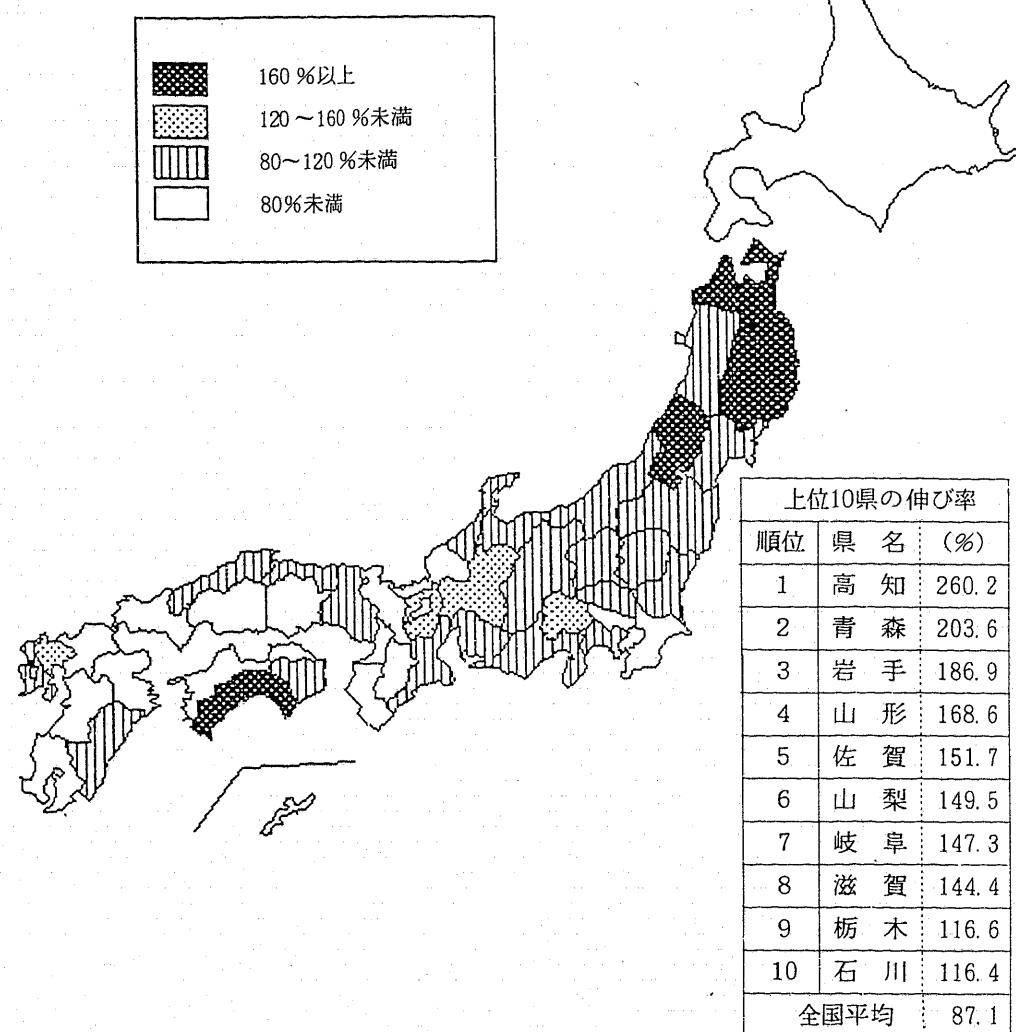
注. 図表内右端の( )内の数字は昭和55年を100とした平成元年の指標値である。

(6) 有形固定資産投資総額の昭和55年から平成元年までの推移をみると、この間全国平均で87.1%の増加となっている。

これを都道府県別にみると、増加率が最も高いのは、高知県（昭和55年比3.6倍）で、以下、青森県（同3倍）、岩手県（同2.9倍）、山形県（同2.7倍）など26県が全国平均を上回っている。

また、地域別にみると、東北地方、中部地方、北関東地方の伸びが高くなっている（第10図）。

第10図 従業者30人以上の事業所の都道府県別有形固定資産投資総額の伸び率マップ（昭和55年比）



注. 伸び率 =  $\left(\frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1\right) \times 100$

## 6. 従業者30人以上の事業所の都道府県別動向

(1) 従業者30人以上の事業所について昭和55年から平成元年までの動向をみると、この間事業所数は5万3868事業所から5万9588事業所へ10.6%の増加となっている。これを都道府県別にみると、伸び率の最も高いのは、青森県（昭和55年比57.0%の増加）で、以下、岩手県（同37.9%の増加）、秋田県（同35.0%の増加）、宮崎県（同33.1%の増加）など29県が全国平均増加率を上回っている。

地域別にみると、総じて大都市を除き東北地方、関東地方、中部地方、九州地方の4地方の伸びが高くなっている。従業者30人以上の比較的大規模な製造業の立地はこの4地方へ集中している。

一方、昭和55年当時に最も事業所数の多かった大阪府は、この期間内に事業所数は2.5%のわずかな増加にとどまり、同時点で事業所数第2位の東京都は△14.6%の大幅な減少となった。

このように、昭和55年から平成元年までの間に2大都市圏から地方へと製造業の地方分散化が着実に進展していることがうかがわれる（第11図、M表）。

(2) 事業所数の増加率が全国平均を上回った29県について産業別にみると、ほとんどの県で電気機械器具製造業の事業所の急増が増加要因となっている。電気機械器具製造業は29県中25県において事業所数増加要因の第1位であり、他の4県においても第2位となっている。

また、昭和55年から平成元年までに増加した事業所数は29県の合計で5430事業所であるが、そのうち電気機械器具製造業の増加数は2462事業所であり、全体の45.3%という圧倒的なウエイトを占めている。

電気機械器具製造業に次ぐ増加要因となっている産業としては、衣服・その他の繊維製品製造業、一般機械器具製造業、金属製品製造業等が挙げられるが、各県ごとに、第2位の産業にはばらつきがみられる。

そのなかで特徴的なのは、衣服・その他の繊維製品製造業であり、東北地方、九州地方で集中的に事業所数が増加している反面、関東地方、中部地方では減少している県が多い。

(3) 従業者30人以上の事業所の昭和55年から平成元年までの従業者数の推移をみると、この間全国平均で8.9%の増加となっている。

従業者数の増加は事業所数の増加とほぼ同様の傾向を示し、事業所数が全国平均増加率を上回っている県は、ほとんど従業者数についても全国平均増加率を上回っており、事業所数の増加が即、雇用の増大に結びついている。事業所数の増加率が特に高い各県の動向をみると、この期間内の従業者数の増加率もほぼこれに比例して高く、事業所増

加率上位10県のうち7県までが従業者増加率上位10県に入っている。また、東北、九州地方での増加傾向が強くなっている（M表）。

(4) 昭和55年から平成元年までの製造品出荷額等の増加率は、全国平均で42.0%という高い伸びを示しているが、事業所数の増加率が全国平均を上回っている29県のうち24県までは、製造品出荷額等においても全国平均増加率を上回る伸びを示している。

また、付加価値額の動向についてみると、同期間に全国平均で63.0%という極めて高い増加率となっているが、事業所数の増加率が全国平均を上回る29県のうち25県は、付加価値額でも全国平均の増加率を上回る増加となっている。

製造品出荷額等、付加価値額をみると、首都圏、中部圏、近畿圏の周辺地域での伸び率が高く、北海道、中国地方、四国地方では伸び率が低くなっている。付加価値額では東北地方の伸び率が高くなっている。

東京都、大阪府については、事業所数、従業者数の推移が停滞している。しかしながら、製造品出荷額等、付加価値額の推移においては、増加を示しており、製造業の分野でも高付加価値化が進んでいる状況がうかがわれる（第11図、M表）。

(5) L表は、事業所数増加率上位10県について事業所数、従業者数、製造品出荷額等、付加価値額に関する産業別増加寄与率をしたものである。

事業所数増加率上位10県は、各県とも従業者数、製造品出荷額等（大分県を除く）、付加価値額について、いずれも全国平均増加率を上回る高い増加率となっている。

この高い増加率に最も寄与した産業は電気機械器具製造業であり、その増加寄与率は事業所数、従業者数、製造品出荷額等、付加価値額のいずれにおいても、若干の例外はあるものの、ほとんど第1位となっており、極めて大きなウエイトを占めている。また、衣服・その他の繊維製品製造業は、青森、秋田の2県で事業所数増加寄与率の第1位を占め、高い雇用効果をもたらしているが、製造品出荷額等、付加価値額においては、増加寄与率は10%程度にとどまっている。

上記の各県の動向にみると、電気機械器具製造業を中心とする従業者30人以上の事業所数の増加は、雇用の増大、製造品出荷額等や付加価値額の増大に直結し、地域経済の発展に大きく貢献している。

表 従業者30人以上の事業所数の伸び率上位10県の動向（昭和55年比）

(単位：%)

順位	県名	事業所数		従業者数		製造品出荷額等		付加価値額	
		対55年伸び率	増加寄与率第1位の産業	対55年伸び率	増加寄与率第1位の産業	対55年伸び率	増加寄与率第1位の産業	対55年伸び率	増加寄与率第1位の産業
1	青森	57.0	衣服(55.5)	58.3	電気(44.8)	58.6	電気(33.7)	107.1	電気(22.1)
2	岩手	37.9	電気(45.7)	36.4	電気(61.1)	83.1	電気(65.1)	94.7	電気(59.6)
3	秋田	35.0	衣服(37.8)	47.2	電気(51.5)	58.0	電気(66.4)	84.6	電気(53.2)
4	宮崎	33.1	電気(32.0)	30.5	電気(60.1)	52.8	電気(42.7)	72.6	電気(31.2)
5	山形	28.3	電気(57.4)	39.3	電気(62.5)	96.4	電気(55.4)	102.2	電気(45.0)
6	福島	25.3	電気(58.5)	26.2	電気(81.8)	90.6	電気(57.6)	88.6	電気(48.1)
7	山梨	22.9	電気(45.5)	48.5	電気(58.2)	158.9	電気(52.0)	201.2	電気(55.7)
8	大分	20.9	電気(43.4)	24.0	電気(58.9)	14.7	電気(140.2)	89.0	電気(42.9)
9	石川	19.6	電気(41.6)	20.8	電気(81.6)	81.3	電気(31.2)	84.0	電気(28.0)
10	静岡	18.9	電気(42.6)	13.7	電気(63.4)	64.8	輸送用(25.6)	87.1	化学(24.1)
製造業平均		10.6		8.9		42.0		63.0	

注 1. 衣服：衣服・その他の繊維製品製造業、電気：電気機械器具製造業、輸送用：輸送用機械器具製造業

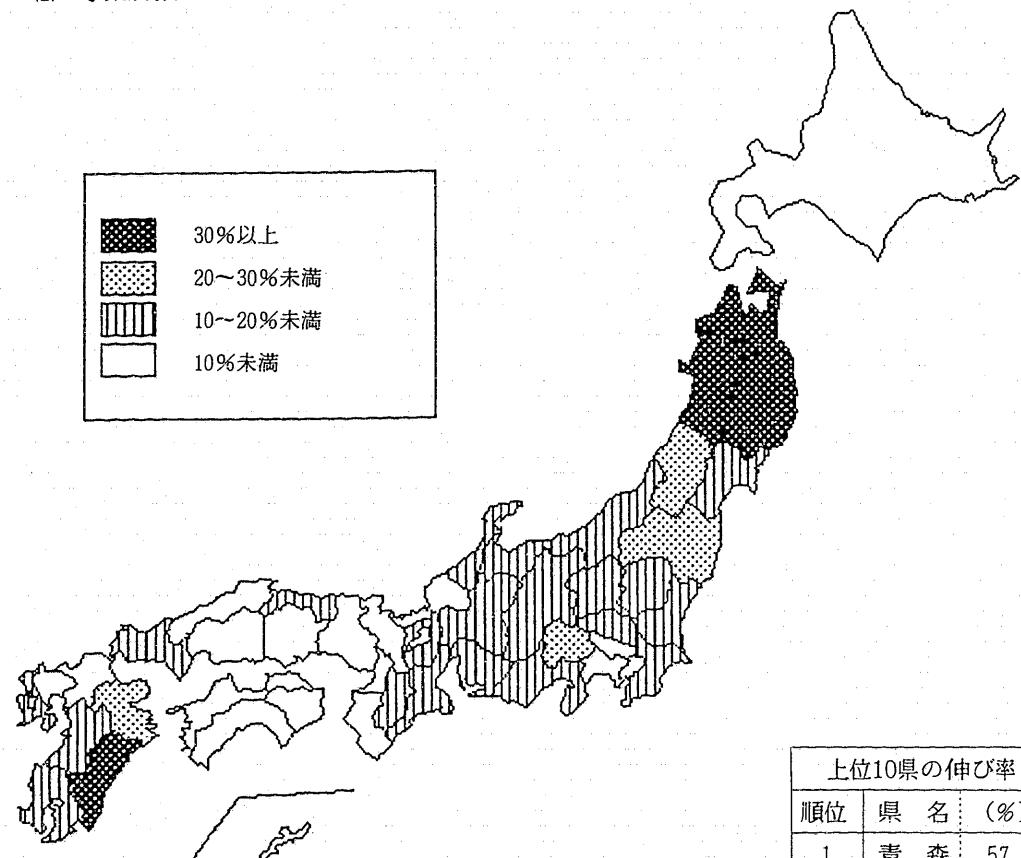
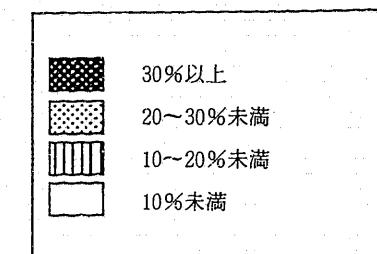
化学：化学工業

2. ( )内の数字は、産業の増加寄与率である。

3. 伸び率 =  $(\frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1) \times 100$ 

第11図 従業者30人以上の事業所の都道府県別の伸び率マップ（昭和55年比）

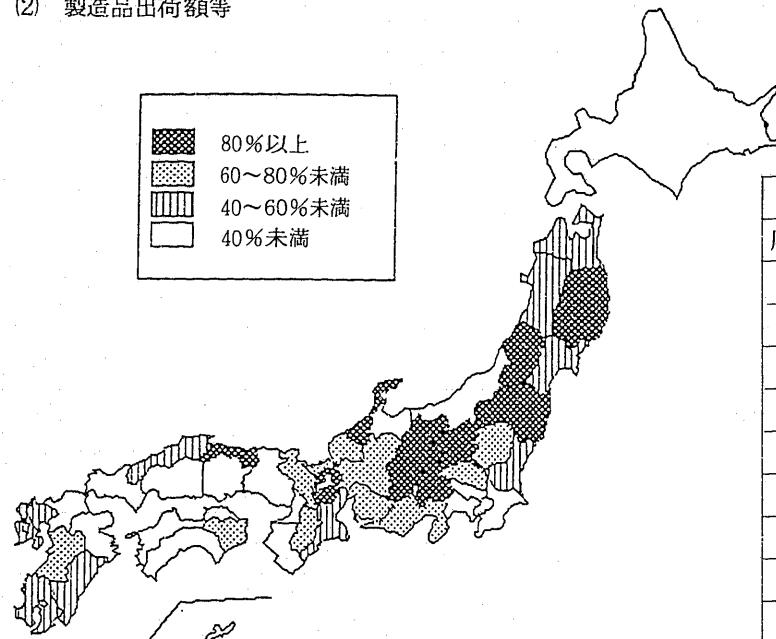
(1) 事業所数



上位10県の伸び率		
順位	県名	(%)
1	青森	57.0
2	岩手	37.9
3	秋田	35.0
4	宮崎	33.1
5	山形	28.3
6	福島	25.3
7	山梨	22.9
8	大分	20.9
9	石川	19.6
10	静岡	18.9
全国平均		10.6

注.伸び率 =  $(\frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1) \times 100$

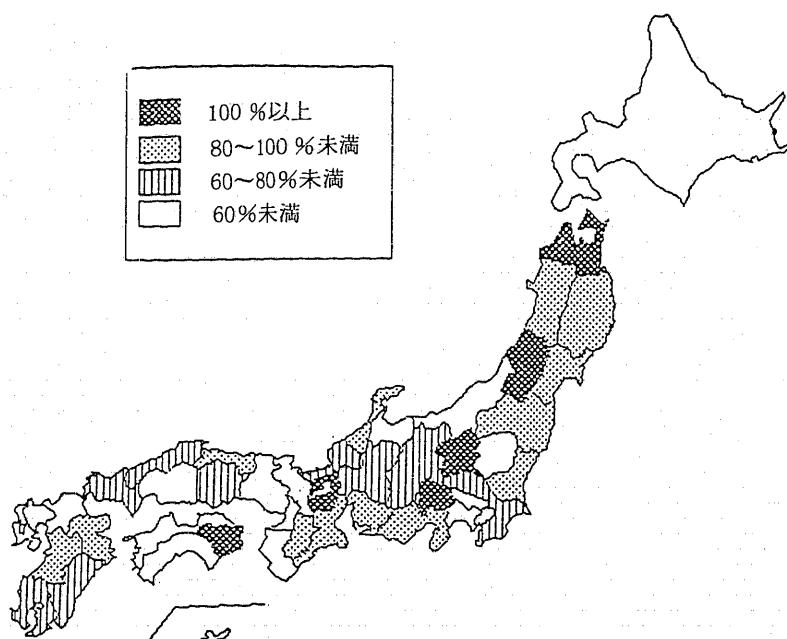
## (2) 製造品出荷額等



注.伸び率=

$$\left( \frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1 \right) \times 100$$

## (3) 付加価値額



注.伸び率=

$$\left( \frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1 \right) \times 100$$

M表 従業者30人以上の事業所の都道府県別伸び率順位 (昭和55年比)

(単位: %)

順位	事業所数		従業者数		製造品出荷額等		付加価値額	
	県名	伸び率	県名	伸び率	県名	伸び率	県名	伸び率
	全国	10.6	全国	8.9	全国	42.0	全国	63.0
1	青森	57.0	青森	58.3	山梨	158.9	山梨	201.2
2	岩手	37.9	山梨	48.5	群馬	107.3	滋賀	136.0
3	秋田	35.0	秋田	47.2	鳥取	96.7	群馬	119.2
4	宮崎	33.1	山形	39.3	山形	96.4	青森	107.1
5	山形	28.3	鹿児島	36.9	滋賀	93.5	徳島	102.3
6	福島	25.3	岩手	36.4	長野	91.8	山形	102.2
7	山梨	22.9	奈良	34.8	福島	90.6	三重	95.7
8	大分	20.9	宮崎	30.5	岩手	83.1	岩手	94.7
9	石川	19.6	福島	26.2	石川	81.3	大分	89.0
10	静岡	18.9	群馬	25.9	奈良	79.2	福島	88.6
11	熊本	18.6	宮城	24.8	福井	72.7	奈良	88.1
12	千葉	18.5	滋賀	24.3	熊本	72.5	茨城	87.4
13	鹿児島	18.4	大分	24.0	岐阜	69.0	静岡	87.1
14	宮城	18.4	熊本	21.9	京都	66.2	秋田	84.6
15	三重	17.8	鳥取	21.4	愛知	66.0	熊本	84.2
16	滋賀	17.8	石川	20.8	埼玉	65.9	石川	84.0
17	埼玉	17.2	茨城	20.6	徳島	65.2	愛知	82.7
18	茨城	17.1	三重	19.8	静岡	64.8	島根	82.4
19	富山	17.0	埼玉	18.3	栃木	62.3	宮城	81.0
20	奈良	16.9	長野	16.9	鹿児島	59.0	岐阜	79.8
21	鳥取	16.6	栃木	15.3	青森	58.6	長野	78.2
22	栃木	15.7	愛知	14.5	秋田	58.0	山梨	74.4
23	岐阜	14.2	静岡	13.7	宮城	57.3	福井	74.3
24	長崎	13.5	岐阜	13.5	茨城	57.2	宮崎	72.6
25	山口	13.1	新潟	13.3	長崎	56.5	埼玉	72.3
26	愛知	12.1	島根	11.0	三重	54.9	山口	71.3
27	群馬	11.9	千葉	9.7	宮崎	52.8	京都	66.7
28	新潟	11.5			島根	52.6	千葉	65.2
29	長野	11.2			佐賀	49.1	鹿児島	64.2
30							島根	63.8
	大阪	2.5	大阪	△3.7	大阪	22.7	大阪	34.8
	東京	△14.6	東京	△15.7	東京	32.0	東京	37.6

注.伸び率=  $\left( \frac{\text{平成元年}}{\text{昭和55年}} - 1 \right) \times 100$

## 7. 工業用地及び工業用水の状況（従業者30人以上の事業所）

平成元年における製造事業所のうち従業者30人以上の事業所数は、5万9588事業所（前年比1.0%の増加）である。これらの事業所における工業用地及び工業用水の状況は以下のとおりである。

### (1) 産業別工業用地

#### ① 敷地面積

事業所の敷地面積は13億6952万m<sup>2</sup>で、前年比1.6%の増加となっている。

増加した主な産業は、出版・印刷・同関連産業（前年比6.5%の増加）、電気機械器具製造業（同4.4%の増加）、プラスチック製品製造業（同3.6%の増加）、金属製品製造業（同3.3%の増加）などである。

一方、減少した産業は石油製品・石炭製品製造業（前年比△1.5%の減少）のみである（第7表）。

#### ② 建築面積及び延べ建築面積

事業所の建築面積は3億5202万m<sup>2</sup>、前年比2.2%の増加、延べ建築面積は4億5506万m<sup>2</sup>、同2.5%の増加となっている。

建築面積が増加した主な産業は、プラスチック製品製造業（前年比6.8%の増加）、電気機械器具製造業（同4.4%の増加）、出版・印刷・同関連産業（同4.1%の増加）、衣服・その他の繊維製品製造業（同4.0%の増加）などである。

一方、建築面積が減少した産業は、鉄鋼業（前年比△0.3%の減少）のみである（第7表）。

#### ③ 用地の取得状況

工業用地の取得面積は3295万m<sup>2</sup>で、前年比では31.1%の増加であり、4年ぶりに30%台の高い伸びとなっている（第9表）。

### (2) 工業用水の使用状況

工業用水の使用量は1日当たり、1億8196万m<sup>3</sup>、前年比2.9%の増加となっている。これを淡水と海水に分けてみると、淡水は1億4394万m<sup>3</sup>、同3.2%の増加、海水は3803万m<sup>3</sup>、同2.0%の増加である（第10表）。

#### ① 淡水の水源別用水量

淡水の1日当たりの使用状況を回収水と補給水（工業用水道、上水道、地表水・伏流水、井戸水、その他の合計）に分けてみると、回収水は前年比で3.6%増加し1億886万m<sup>3</sup>となった。構成比は75.6%と前年（75.3%）より0.3ポイント上昇した。補給水は前年比1.7%増加し3507万m<sup>3</sup>となった。構成比は24.4%と0.3ポイント低下した。

補給水の内訳をみると、工業用水道が1245万m<sup>3</sup>で補給水に占める構成比は、35.5%と前年（34.8%）より0.7ポイント上昇した。

以下、井戸水は1019万m<sup>3</sup>で補給水に占める構成比は29.1%、地表水・伏流水は946万m<sup>3</sup>、同27.0%、上水道が253万m<sup>3</sup>、同7.2%となっている（第11表）。

#### ② 産業別用水量

工業用水の1日当たり使用量を産業別にみると、化学工業が最も多く、5855万m<sup>3</sup>、前年比3.8%の増加（構成比32.2%）、次いで、鉄鋼業が5172万m<sup>3</sup>、同3.1%の増加（同28.4%）となっており、この2産業で全体の60.6%を使用している。以下、パルプ・紙・紙加工品製造業が1556万m<sup>3</sup>、同1.3%の増加（同8.6%）、石油製品・石炭製品製造業が1296万m<sup>3</sup>、同6.3%の増加（同7.1%）、輸送用機械器具製造業が1163万m<sup>3</sup>、同3.7%の増加（同6.3%）の順となり、この順位は前年と変わらない（第12表）。













第 12 表 産 業 中 分

産業	用			
	合計			
	昭和 63 年	平成元年	前年比 (%)	構成比 (%)
合 計	176,794,866	181,963,372	102.9	100.0
12 食 料 品 製 造 業	5,521,071	5,597,213	101.4	3.1
13 飲 料・飼 料・たばこ製 造 業	1,131,005	1,175,190	103.9	0.6
14 繊 維 工 業	3,168,301	3,207,104	101.2	1.8
15 衣 服・そ の 他 の 繊 維 製 品 製 造 業	68,935	73,009	105.9	0.0
16 木 材・木 製 品 製 造 業	77,527	72,058	92.9	0.0
17 家 具・装 備 品 製 造 業	52,005	51,020	98.1	0.0
18 パ ル ブ・紙・紙 加 工 品 製 造 業	15,354,509	15,557,917	101.3	8.6
19 出 版・印 刷・同 関 連 産 業	219,913	214,949	97.7	0.1
20 化 学 工 業	56,419,044	58,554,877	103.8	32.2
21 石 油 製 品・石 炭 製 品 製 造 業	12,187,826	12,961,230	106.3	7.1
22 プ ラ ス テ ィ ッ ク 製 品 製 造 業(別掲を除く)	2,217,577	2,257,957	101.8	1.2
23 ゴ ム 製 品 製 造 業	1,091,549	1,099,301	100.7	0.6
24 な め し 革・同 製 品・毛 皮 製 造 業	51,883	52,227	100.7	0.0
25 窯 業・土 石 製 品 製 造 業	5,004,534	4,667,319	93.3	2.6
26 鉄 鋼 業	50,176,580	51,718,345	103.1	28.4
27 非 鉄 金 属 製 造 業	4,577,306	4,608,042	100.7	2.5
28 金 属 製 品 製 造 業	1,140,619	1,121,243	98.3	0.6
29 一 般 機 械 器 具 製 造 業(33武器製造業を含む)	1,948,681	1,995,905	102.4	1.1
30 電 気 機 械 器 具 製 造 業	4,702,127	4,864,761	103.5	2.7
31 輸 送 用 機 械 器 具 製 造 業	11,211,538	11,626,860	103.7	6.4
32 精 密 機 械 器 具 製 造 業	253,992	264,899	104.3	0.1
34 そ の 他 の 製 造 業	218,344	221,946	101.6	0.1

類 別 用 水 量

(従業者30人以上の事業所)

昭和 63 年	水			
	淡 水			海 水
	(m³/日)	昭 和 63 年	平 成 元 年	(m³/日)
139,525,392	143,936,097	103.2	100.0	37,269,474
4,235,605	4,315,950	101.9	3.0	1,285,466
1,106,517	1,160,270	104.9	0.8	24,488
3,167,251	3,206,004	101.2	2.2	1,050
68,935	73,008	105.9	0.1	0
77,147	71,778	93.0	0.0	380
52,005	51,020	98.1	0.0	0
15,265,069	15,475,147	101.4	10.8	89,440
219,913	214,949	97.7	0.1	0
43,517,739	45,045,849	103.5	31.3	12,901,305
6,267,080	6,750,165	107.7	4.7	5,920,746
2,217,577	2,257,957	101.8	1.6	0
1,091,549	1,099,301	100.7	0.8	0
51,883	52,227	100.7	0.0	0
3,382,501	3,398,784	100.5	2.4	1,622,033
36,536,767	37,857,938	103.6	26.3	13,639,813
2,989,130	3,027,011	101.3	2.1	1,588,176
1,140,609	1,121,233	98.3	0.8	10
1,763,138	1,812,771	102.8	1.3	185,543
4,702,127	4,864,761	103.5	3.4	0
11,200,514	11,593,129	103.5	8.1	11,024
253,992	264,899	104.3	0.2	0
218,344	221,946	101.6	0.2	0

